

RTE for UNIX

セットアップ・マニュアル (Rev. 1.10)

改訂履歴

実施日	Revision	章	内容
1996年12月20日	1.00		初版
1998年05月05日	1.10	1 2 5.1	・ Solaris2.5.1(sparc)追加 ・ 章追加 ・ 注意事項追加

目次

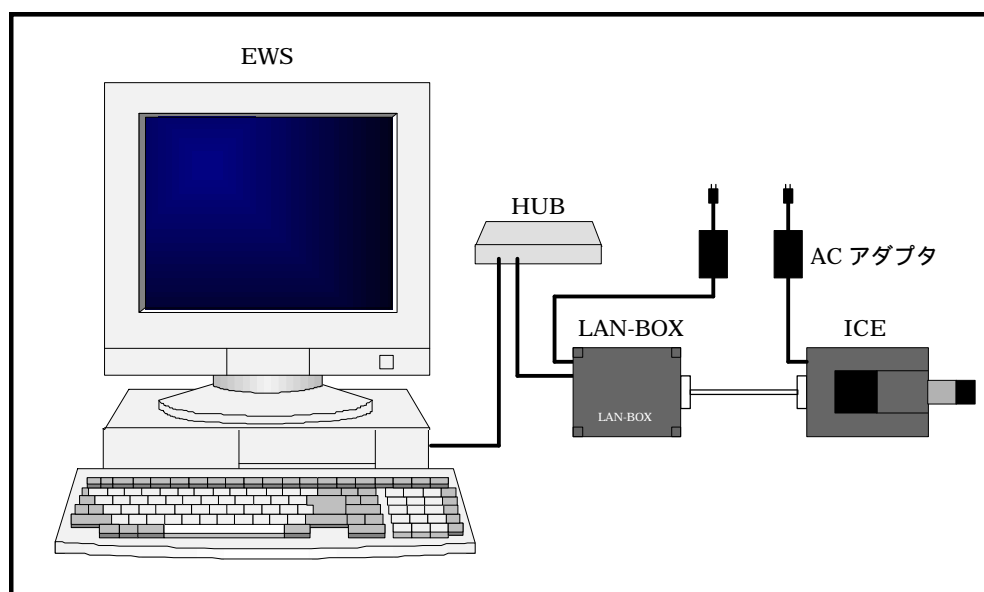
1. はじめに	4
1.1. セットアップ概要.....	4
1.2. アンインストール概要.....	4
2. セットアップ手順 (Solaris 2.5.1 編)	5
2.1. CD-ROM のマウント.....	5
2.1.1. ローカル接続された CD-ROM ドライブのマウント.....	5
2.1.2. リモート接続された CD-ROM ドライブのマウント.....	5
2.2. tar ファイルの展開.....	5
2.3. 環境変数の設定.....	6
2.4. CD-ROM のイジェクト.....	6
2.4.1. ローカル接続された CD-ROM ドライブのイジェクト.....	6
2.4.2. リモート接続された CD-ROM ドライブのイジェクト.....	6
3. セットアップ手順 (SunOS 4.1.x 編)	7
3.1. CD-ROM のマウント.....	7
3.1.1. ローカル接続された CD-ROM ドライブのマウント.....	7
3.1.2. リモート接続された CD-ROM ドライブのマウント.....	7
3.2. tar ファイルの展開.....	8
3.3. 環境変数の設定.....	8
3.4. CD-ROM のアンマウント.....	8
3.4.1. ローカル接続された CD-ROM ドライブのアンマウント.....	8
3.4.2. リモート接続された CD-ROM ドライブのマウント.....	8
4. セットアップ手順 (HP-UX 9.x 編)	10
4.1. CD-ROM のマウント.....	10
4.1.1. ローカル接続された CD-ROM ドライブのマウント.....	10
4.1.2. リモート接続された CD-ROM ドライブのマウント.....	10
4.2. tar ファイルの展開.....	11
4.3. 環境変数の設定.....	11
4.4. CD-ROM のアンマウント.....	11
4.4.1. ローカル接続された CD-ROM ドライブのアンマウント.....	11
4.4.2. リモート接続された CD-ROM ドライブのマウント.....	11
5. 設定と動作確認	13
5.1. 設定 (setrte の実行).....	13
5.2. 動作確認 (ute4unix の実行).....	13
6. setrte コマンド	15
6.1. 設定.....	15
6.2. 設定状態の表示.....	15

7. ソフトウェアの構成 (Multi)	16
8. 内部コマンド.....	17

1. はじめに

本書は、『RTE for UNIX』のセットアップ方法について記述しています。『RTE for UNIX』は、エンジニアリング・ワークステーション(以下 EWS と略します)上から LAN 経由で RTE シリーズの ICE を接続するためのソフトウェアです。『RTE for UNIX』には、Sun Microsystems 社の Solaris2.5.1(sparc)用のもの、Sun Microsystems 社の SunOS4.1.x 用のもの、Hewlett Packard 社の HP-UX9.x 用のものがあります。

また、RTE シリーズの ICE を LAN 経由で EWS に接続するためには、ハードウェアとして LAN-BOX が必要です。接続の様子を下図に示します。LAN-BOX については、『LAN-BOX ユーザーズ・マニュアル』を参照してください。



1.1. セットアップ概要

『RTE for UNIX』のセットアップの概要を以下に示します。『RTE for UNIX』のセットアップを開始する前に、LAN-BOX の設定を行って下さい (『LAN-BOX ユーザーズ・マニュアル』参照)。

- セットアップ用の CD-ROM をマウントする
- セットアップするディレクトリを作る
- tar コマンドを用いて、CD-ROM からファイルをセットアップ・ディレクトリに展開する
- 環境変数に"RTE4UNIX"を設定する
- setrte を実行する (『RTE for UNIX』の設定)
- rte4unix を実行する (LAN-BOX の接続の確認と、ICE の簡易テスト)

1.2. アンインストール概要

『RTE for UNIX』のアンインストールは、セットアップ・ディレクトリのファイルを全て消去することで行えます。

2. セットアップ手順 (Solaris 2.5.1 編)

この章では、Solaris2.5.1(sparc)へ『RTE for UNIX』をセットアップする手順を説明します。セットアップ後の設定については、『5.設定と動作確認』で説明します。

2.1. CD-ROM のマウント

『RTE for UNIX』のセットアップ CD-ROM を EWS にマウントします。『RTE for UNIX』をセットアップしようとしている EWS に CD-ROM ドライブが直接接続されている (ローカル接続) 場合と、ネットワーク上の別の EWS に接続されている (リモート接続) 場合に分けて説明します。

2.1.1. ローカル接続された CD-ROM ドライブのマウント

『RTE for UNIX』のセットアップ CD-ROM を CD-ROM ドライブに入れて下さい。CD-ROM は自動的にマウントされます。

以下の例では、/cdrom というディレクトリに CD-ROM がマウントされています。



CD-ROM が自動的にマウントされない場合は、システム管理者にご相談ください。

2.1.2. リモート接続された CD-ROM ドライブのマウント

リモートの EWS に接続された CD-ROM をマウントする場合は、手動でマウント作業を行います。『RTE for UNIX』のセットアップ CD-ROM を CD-ROM ドライブに入れ、それぞれの EWS 上で、次のように入力してください。

以下の例では、ホスト名 rem_ews で /cdrom に自動的にマウントされた CD-ROM ドライブを、ホスト名 loc_ews の /mnt にマウントする方法です。

rem_ews 上での作業

```
/usr/sbin/exportfs -iv -o ro,access=loc_ews,root=loc_ews /cdrom/cdrom0
```

loc_ews 上での作業

```
/sbin/mount -F nfs -r rem_ews:/cdrom/cdrom0 /mnt
```



rem_ews は NFS サーバとして、loc_ews は NFS クライアントとして設定されていなければなりません。詳しくはシステム管理者にお聞きください。



exportfs コマンドは、root (スーパー・ユーザー) でないと実行できません。



CD-ROM が自動的にマウントされない場合は、システム管理者にご相談ください。



マウント先のディレクトリ (上記の場合の /mnt) は、mount コマンドを実行する前に作成されている必要があります。



上記の例では、rem_ews も loc_ews も Solaris2.5.1 が動作しているものとして、説明していません。




上記のように CD-ROM をマウントする方法もありますが、『RTE for UNIX』のセットアップ CD-ROM に入っている、setupxxx.tar ファイルを、リモート EWS から cp や ftp でローカル EWS 上に持ってくる方法もあります。


2.2. tar ファイルの展開

『RTE for UNIX』をセットアップするディレクトリを作成し、『RTE for UNIX』のセットアップ CD-ROM から必要なファイルを tar コマンドで取り出します。

以下の例では、/cdrom にマウントした CD-ROM から、/usr/local/rte4unix ディレクトリに『RTE for UNIX』をセットアップしています。

```
mkdir /usr/local/rte4unix
cd /usr/local/rte4unix
/bin/tar xvf /cdrom/cdrom0/sol2_5_1/setupsol.tar
```

 取り出されたファイルのオーナーは、tar コマンドを実行したユーザになります。

 必要であれば、ファイルのパーミッションを変更してください。

2.3. 環境変数の設定

『RTE for UNIX』をインストールしたディレクトリを環境変数の”RTE4UNIX”に設定するために、次のように入力します。また、環境変数”PATH”にも『RTE for UNIX』のディレクトリを設定しておきます。

以下の例では、『RTE for UNIX』が /usr/local/rte4unix にセットアップされている場合です。

```
setenv RTE4UNIX /usr/local/rte4unix
setenv PATH /usr/local/rte4unix:$PATH
```



上記の setenv の設定は、『RTE for UNIX』を使う場合に必ず必要になります。したがって、cshrc などのシェル起動スクリプトに記述してください。

2.4. CD-ROM のイジェクト

必要なくなった CD-ROM をイジェクトします。

2.4.1. ローカル接続された CD-ROM ドライブのイジェクト

次のように入力してください。

```
/bin/eject cdrom0
```

2.4.2. リモート接続された CD-ROM ドライブのイジェクト

リモートの EWS に接続された CD-ROM をイジェクトする場合、アンマウント作業後イジェクトを行います。

以下の例では、ホスト名 loc_ews の /mnt にマウントしてあるリモートの CD-ROM ドライブをアンマウントし、ホスト名 rem_ews の CD-ROM ドライブから CD-ROM を取り出しています。

loc_ews 上での作業

```
/sbin/umount /mnt
```

rem_ews 上での作業

```
/usr/sbin/exportfs -u /cdrom/cdrom0
/bin/eject cdrom0
```



exportfs コマンドは、root (スーパー・ユーザー) でないと実行できません。

3. セットアップ手順(SunOS 4.1.x 編)

この章では、SunOS 4.1.x へ『RTE for UNIX』をセットアップする手順を説明します。セットアップ後の設定については、『5.設定と動作確認』で説明します。

3.1. CD-ROM のマウント

『RTE for UNIX』のセットアップ CD-ROM を EWS にマウントします。『RTE for UNIX』をセットアップしようとしている EWS に CD-ROM ドライブが直接接続されている（ローカル接続）場合と、ネットワーク上の別の EWS に接続されている（リモート接続）場合に分けて説明します。

3.1.1. ローカル接続されたCD-ROM ドライブのマウント

『RTE for UNIX』のセットアップ CD-ROM を CD-ROM ドライブに入れ、次のように入力してください。

以下の例では、/mnt というディレクトリに CD-ROM をマウントしています。

```
/usr/etc/mount -r -t hsfs /dev/sr0 /mnt
```



mount コマンドは、root（スーパー・ユーザー）でないと実行できません。



“/dev/sr0”の部分の“sr0”は、CD-ROM に割り付けられている SCSI-ID によっては異なることがあります（上記例では SCSI-ID=6）。上記のように行ってもマウントできない場合は、システム管理者にご相談ください。



マウント先のディレクトリ（上記の場合/mnt）は、mount コマンドに先立って作成されている必要があります。

3.1.2. リモート接続されたCD-ROM ドライブのマウント

リモートの EWS に接続された CD-ROM をマウントする場合、2 回のマウント作業を行います。1 回目はリモート EWS 上で、もう 1 回は『RTE for UNIX』をセットアップする EWS 上です。

『RTE for UNIX』のセットアップ CD-ROM を CD-ROM ドライブに入れ、それぞれの EWS 上で、次のように入力してください。

以下の例では、ホスト名 rem_ews にある CD-ROM ドライブを rem_ews の/rem_mnt にマウントし、更にそれをホスト名 loc_ews の/mnt にマウントする方法です。

rem_ews 上での作業

```
/usr/etc/mount -r -t hsfs /dev/sr0 /rem_mnt
/usr/etc/exportfs -iv -o ro,access=loc_ews,root=loc_ews /rem_mnt
```

loc_ews 上での作業

```
/usr/etc/mount -r -t nfs rem_ews:/rem_mnt /mnt
```



rem_ews は NFS サーバとして、loc_ews は NFS クライアントとして設定されていなければなりません。詳しくはシステム管理者にお聞きください。



mount コマンドおよび exportfs コマンドは、root（スーパー・ユーザー）でないと実行できません。



“/dev/sr0”の部分の“sr0”は、CD-ROM に割り付けられている SCSI-ID によっては異なることがあります。上記のように行ってもマウントできない場合は、システム管理者にご相談ください。



マウント先のディレクトリ（上記の場合/rem_mnt および/mnt）は、mount コマンドを実行する前に作成されている必要があります。



上記の例では、rem_ews も loc_ews も SunOS 4.1.x が動作しているものとして、説明していません。



上記のように CD-ROM をマウントする方法もありますが、『RTE for UNIX』のセットアップ CD-ROM に入っている、setupxxx.tar ファイルを、リモート EWS から cp や ftp でローカル EWS 上に持ってくる方法もあります。

3.2. tar ファイルの展開

『RTE for UNIX』をセットアップするディレクトリを作成し、『RTE for UNIX』のセットアップ CD-ROM から必要なファイルを tar コマンドで取り出します。

以下の例では、/mnt にマウントした CD-ROM から、/usr/local/rte4unix ディレクトリに『RTE for UNIX』をセットアップしています。

```
mkdir /usr/local/rte4unix
cd /usr/local/rte4unix
/bin/tar xvf /mnt/sun4_1/setupsun.tar
```



取り出されたファイルのオーナーは、tar コマンドを実行したユーザになります。



必要であれば、ファイルのパーミッションを変更してください。

3.3. 環境変数の設定

『RTE for UNIX』をインストールしたディレクトリを環境変数の"RTE4UNIX"に設定するために、次のように入力します。また、環境変数"PATH"にも『RTE for UNIX』のディレクトリを設定しておきます。

以下の例では、『RTE for UNIX』が /usr/local/rte4unix にセットアップされている場合です。

```
setenv RTE4UNIX /usr/local/rte4unix
setenv PATH /usr/local/rte4unix:$PATH
```



上記の setenv の設定は、『RTE for UNIX』を使う場合に必ず必要になります。したがって、cshrc などのシェル起動スクリプトに記述してください。

3.4. CD-ROM のアンマウント

必要なくなった CD-ROM をアンマウントします。

3.4.1. ローカル接続された CD-ROM ドライブのアンマウント

次のように入力してください。

以下の例では、/mnt にマウントされた CD-ROM ドライブをアンマウントし、CD-ROM を取り出しています。

```
/usr/etc/umount /mnt
/bin/eject /dev/sr0
```



umount コマンドは、root (スーパー・ユーザー) でないと実行できません。

3.4.2. リモート接続された CD-ROM ドライブのマウント

リモートの EWS に接続された CD-ROM をアンマウントする場合、2 回のアンマウント作業を行います。1 回目は『RTE for UNIX』をセットアップした EWS 上で、もう 1 回はリモート EWS 上

です。

以下の例では、ホスト名 `loc_ews` の `/mnt` にマウントしてあるリモートの CD-ROM ドライブをアンマウントし、ホスト名 `rem_ews` の `/rem_mnt` にマウントしてある CD-ROM ドライブをアンマウントし、CD-ROM を取り出しています。

loc_ews 上での作業

```
/usr/etc/umount /mnt
```

rem_ews 上での作業

```
/usr/etc/exportfs -u /rem_mnt  
/usr/etc/umount /rem_mnt  
/bin/eject /dev/sr0
```



`umount` コマンドおよび `exportfs` コマンドは、`root` (スーパー・ユーザー) でないと実行できません。

4. セットアップ手順(HP-UX 9.x 編)

この章では、HP-UX 9.x へ『RTE for UNIX』をセットアップする手順を説明します。セットアップ後の設定については、『5.設定と動作確認』で説明します。

4.1. CD-ROM のマウント

『RTE for UNIX』のセットアップ CD-ROM を EWS にマウントします。『RTE for UNIX』をセットアップしようとしている EWS に CD-ROM ドライブが直接接続されている（ローカル接続）場合と、ネットワーク上の別の EWS に接続されている（リモート接続）場合に分けて説明します。

4.1.1. ローカル接続されたCD-ROM ドライブのマウント

『RTE for UNIX』のセットアップ CD-ROM を CD-ROM ドライブに入れ、次のように入力してください。

以下の例では、/disc というディレクトリに CD-ROM をマウントしています。

```
/etc/mount -r -t cdfs /dev/dsk/c201d2s0 /disc
```



mount コマンドは、root（スーパー・ユーザー）でないと実行できません。



“/dev/dsk/c201d2s0”の部分の“c201d2s0”は、CD-ROM に割り付けられている SCSI-ID によっては異なることがあります（上記例では SCSI-ID=2, “2s0”の“2”が対応）。上記のように行ってもマウントできない場合は、システム管理者にご相談ください。



マウント先のディレクトリ（上記の場合の disc）は、mount コマンドを実行する前に作成されている必要があります。

4.1.2. リモート接続されたCD-ROM ドライブのマウント

リモートの EWS に接続された CD-ROM をマウントする場合、2 回のマウント作業を行います。1 回目はリモート EWS 上で、もう 1 回は『RTE for UNIX』をセットアップする EWS 上です。

『RTE for UNIX』のセットアップ CD-ROM を CD-ROM ドライブに入れ、それぞれの EWS 上で、次のように入力してください。

以下の例では、ホスト名 rem_ews にある CD-ROM ドライブを rem_ews の/rem_disc にマウントし、更にそれをホスト名 loc_ews の/disc にマウントする方法です。

rem_ews 上での作業

```
/etc/mount -r -t cdfs /dev/dsk/c201d2s0 /rem_disc  
/usr/etc/exportfs -iv -o ro,access=loc_ews,root=loc_ews /rem_disc
```

loc_ews 上での作業

```
/etc/mount -r -t nfs rem_ews:/rem_disc /disc
```



rem_ews は NFS サーバとして、loc_ews は NFS クライアントとして設定されていなければなりません。詳しくはシステム管理者にお聞きください。



mount コマンドおよび exportfs コマンドは、root（スーパー・ユーザー）でないと実行できません。



“/dev/dsk/c201d2s0”の部分の“c201d2s0”は、CD-ROM に割り付けられている SCSI-ID によっては異なることがあります（上記例では SCSI-ID=2, “2s0”の“2”が対応）。上記のように行ってもマウントできない場合は、システム管理者にご相談ください。



マウント先のディレクトリ（上記の場合の rem_disc および disc）は、mount コマンドを実行する前に作成されている必要があります。



上記の例では、rem_ews も loc_ews も HP-UX 9.x が動作しているものとして、説明していません。



上記のようにCD-ROM をマウントする方法もありますが、『RTE for UNIX』のセットアップCD-ROM に入っている、setupxxx.tar ファイルを、リモートEWS から cp や ftp でローカルEWS 上に持ってくる方法もあります。

4.2. tar ファイルの展開

『RTE for UNIX』をセットアップするディレクトリを作成し、『RTE for UNIX』のセットアップCD-ROM から必要なファイルを tar コマンドで取り出します。

以下の例では、/disc にマウントした CD-ROM から、/usr/local/rte4unix ディレクトリに『RTE for UNIX』をセットアップしています。

```
mkdir /usr/local/rte4unix
cd /usr/local/rte4unix
/bin/tar xvf '/disc/HPUX9/SETUPHP.TAR;1'
```



取り出されたファイルのオーナーは、tar コマンドを実行したユーザになります。



必要であれば、ファイルのパーミッションを変更してください。

4.3. 環境変数の設定

『RTE for UNIX』をインストールしたディレクトリを環境変数の“RTE4UNIX”に設定するために、次のように入力します。また、環境変数“PATH”にも『RTE for UNIX』のディレクトリを設定しておきます。

以下の例では、『RTE for UNIX』が /usr/local/rte4unix にセットアップされている場合です。

```
setenv RTE4UNIX /usr/local/rte4unix
setenv PATH /usr/local/rte4unix:$PATH
```



上記の setenv の設定は、『RTE for UNIX』を使う場合に必ず必要になります。したがって、cshrc などのシェル起動スクリプトに記述してください。

4.4. CD-ROM のアンマウント

必要なくなった CD-ROM をアンマウントします。

4.4.1. ローカル接続されたCD-ROM ドライブのアンマウント

次のように入力してください。

以下の例では、/disc にマウントされた CD-ROM ドライブをアンマウントし、CD-ROM を取り出しています。

```
/etc/umount /disc
```



umount コマンドは、root (スーパー・ユーザー) でないと実行できません。

4.4.2. リモート接続されたCD-ROM ドライブのマウント

リモートの EWS に接続された CD-ROM をアンマウントする場合、2 回のアンマウント作業を行います。1 回目は『RTE for UNIX』をセットアップした EWS 上で、もう 1 回はリモート EWS 上です。以下の例では、ホスト名 loc_ews の /disc にマウントしてあるリモートの CD-ROM ドライブをアンマ

ウントし、ホスト名 rem_ews の/rem_disc にマウントしてある CD-ROM ドライブをアンマウントしています。

loc_ews 上での作業

```
/etc/umount /disc
```

rem_ews 上での作業

```
/usr/etc/exportfs -u /rem_disc  
/etc/umount /rem_disc
```



umount コマンドおよびexportfs コマンドは、root (スーパー・ユーザー) でないと実行できません。

5. 設定と動作確認

この章では、『RTE for UNIX』のセットアップ後に行わなければならない設定について、及び動作確認の方法について説明します。

5.1. 設定 (setrte の実行)

setrte を実行し、使用する ICE の種類と、LAN-BOX の IP アドレスを設定します。

以下の例では、ICE として『V853』を、LAN-BOX の IP アドレスとして『192.168.1.1』を設定しています。

setrte コマンドの詳細は、『6setrte コマンド』を参照してください。また、LAN-BOX のアドレスの設定方法については、『LAN-BOX ユーザーズ・マニュアル』を参照してください。

```
setrte v853 192.168.1.1
```



setrte コマンドで設定を行うとusr/local/rte4unix/rte4unix ファイルが作成されます。このファイルの書き込みパーミッションは、setrte コマンドを行う全てのユーザに与えられていなければなりません。



setrte コマンドを行うには、環境変数のRTE4UNIX”が正しく設定されていなければなりません。



setrte コマンドは、ICE の種類が変わった場合や、LAN-BOX の IP アドレスの設定が変わった場合には、必ず実行しなければなりません。ICE の種類が変わった時に setrte を実行せずにデバッガを起動すると、正常に動作しないだけでなく、故障の原因にもなります。



setrte コマンドに指定するLAN-BOX の IP アドレスは、LAN-BOX に割り付けられている名前で指定しても構いません。ただし、名前で指定する場合は、DNS (Domain Name System) のサーバーに名前が登録されていなければなりません。



現在の設定状態は、"setrte -s"とすると表示されます。



setrte コマンドは、デバッガを起動するたびに実行する必要はありません。ICE の種類や、LAN-BOX の IP アドレスの設定が変わった場合に限り、1 度だけ実行する必要があります。

5.2. 動作確認 (ute4unix の実行)

rte4unix を実行し、LAN-BOX と ICE の動作確認を行います。次のように入力してください。

```
rte4unix -d
```

コマンドの実行が始まると、結果が表示されます。最後に”RTE functional test completed successfully.”と表示されるのを確認してください。

正常に終了した場合の様子を次ページに示します。例は、ICE として V853 を接続しています。

```
rte4unix Version 1.11.0 Copyright (c) Midas lab,Inc. 1996 All rights reserved.
RTE4UNIX=/usr/local/rte4unix
Connecting to 192.168.1.1
RTE Module Version 1.11.0,Dec 16 1996/12:04:06
CPU DLL Version 1.11.0,Dec 16 1996/12:04:14

Name=<V853> PCno=32 MaxReg=40 RegbufSize=160 F_Flag=00000020
Initialize RTE
Setting environment test
Memory fill test(Fill 0000 100 aa)
Memory read test(Read 0000 100)
Memory write test(Write 0200 10 11,12,....1f,20)
Memory read test(Read 0200 10)
Mapping test(Map 400000 1ff000 Target)
Mapping test(Map a00000 1000 Target)
Mapping list test
Memory write test(Write 0000 100 11,12,....1f,20)
Reset test
Setting BPS test(BPS 0020)
Setting BPH test(BPH 0030)
Setting PC test
Run test
Getting PC test
Delete BP test
Run test
Getting PC test
Delete BP test
Step test
Getting PC test
Step test
Getting PC test
Step test
Getting PC test
Step test
Getting PC test
Step test
Getting PC test
Initialize RTE
RTE functional test completed successfully.
```



“rte4unix -d”は、setrte コマンドの設定が正しく行われていないと、正常に動作しません。



最初の数行を表示して、“Connecting to xxx.xxx.xxx.xxx”の表示で暫く待っても次の表示が出ない場合は、setrte コマンドでのLAN-BOXのIPアドレスの設定に間違いがあるかLAN-BOXの設定でIPアドレスやNET-MASKの設定に誤りがあるものと思われます。



上記の rte4unix の結果は一例であり、バージョン番号や日付は実際のものとは異なることがあります。また、チェックの内容についてもICEの種類によって異なることがあります。

6. setrte コマンド

この章では、setrte コマンドについて説明します。setrte コマンドは引数を省略して起動すると、簡単な使い方が表示されます。

6.1. 設定

setrte コマンドでの設定は、次のフォーマットで行ってください。

```
setrte <ICE> <IP-ADDRESS>
```

ICE : LAN-BOX に接続する ICE の種類を指定します。具体的には、“v853”とか“v852”と指定します。指定可能な ICE の種類は、setrte コマンドを引数を省略して実行すると表示されます。

IP-ADDRESS : LAN-BOX の IP アドレスを指定します。DNS (Domain Name System) が動作しているネットワークに接続されており、LAN-BOX が DNS に登録されていれば、IP アドレスの代わりに LAN-BOX のホスト名でも指定できます。

具体例 :

```
setrte v853 192.168.1.1
```



setrte コマンドはIP アドレスの妥当性については評価していません。IP アドレスの設定が正しいかどうかは、“rte4unix -d”で確認してください。

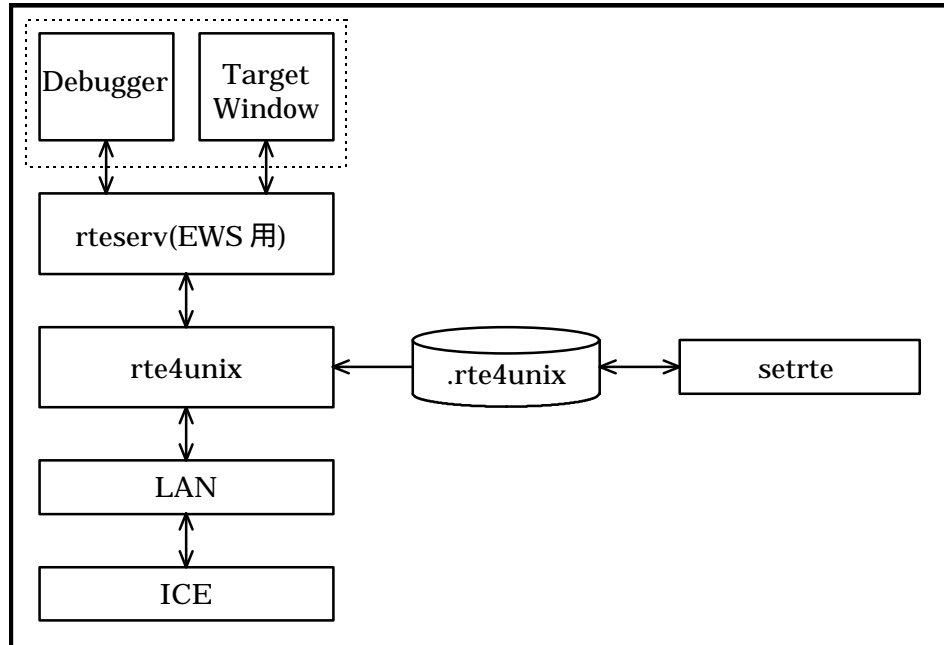
6.2. 設定状態の表示

現在の設定値を表示させるには、次のように入力してください。

```
setrte -s
```

7. ソフトウェアの構成 (Multi)

デバッガとして Green Hills Software 社の Multi を使用した場合のソフトウェアの構成を、下図に示します。



8. 内部コマンド

各デバッガで中でスルー・コマンドとして使用できる各 ICE の内部コマンドについては、ICE に付属のマニュアルを参照してください。

- Memo -